

一般の部 「童話賞」

「エノポロの木」

静岡市 鈴木 泉

おいらのなまえは、エノポロ。丸子川まりがわに住んでいるかっぱの子どもだ。

かっぱのこと、知っているかい？

あたまのおさらは、いつもぬれていないといけないんだ。とりのようなくちばし。せなかにかめのような甲こうらをしょって、手足には水かきがあるんだ。およぎはとくいだぜ。

そう、水辺みずべにすんでいる妖怪ようかいなのさ。知っているじゃないか。

おいら、いま、こまっているんだ。上のまえ歯が一本ぬけちゃったんだ。

かっぱはね、こどもの歯がぬけたあと、おとなの歯は、しぜんにはえてはこないのさ。おまじないがあつて、そのとおりにすれば、なんどでもはえてくるんだ。

まえ歯がないと、たべものにかぶりつけないだろう？それに、おまじないをしなければ、ほかの歯もどんどんなくなつて、おいら「歯なしのエノポロ」になつちまう。

それで、おいら、川のちかくの青木ヶ池あおきがいけにすんでいる。もの知りじいちゃんのところへ行つたんだ。

「そうか。はじめて歯がぬけたのか。エノポロも大きくなつたもんじゃ。そもそも、かっぱの歯はな……」

はなしがなくなりそうだったので、「じいちゃん、おまじないをおしえてくれよ。おいら、いそいでいるんだ。」

「おお、そうか。ちかごろは、かっぱもいそ

がしいからのう。」

じいちゃんのおしえは、こうだった。

手を「ばんばん、ぱぱばん」とたたく。これは「はじめるぞ」のあいずだ。

でんぐりがえりを一回したあと、ほつぺたを、ぱんとたたく。

でんぐりがえりを二回したあと、口を「にっ」とあけてわらう。

でんぐりがえりを三回したあと、こぶしをにぎつて、「ぎゅっ」と歯をくいしばる。

でんぐりがえりを四回したあと、右足をあげて目をつぶり、「くーっ」と言う。

でんぐりがえりを五回したあと、カチカチカチツと歯をならす。

そして、エノポロの木に、おまじないのことはを言うつてことだ。

エノポロの木は、おいらが「じぶんの木」ときめた木のことだ。おいらの木は、丸子川の土手にある小さなマテバシイの木だ。かっぱは、じぶんの木を一生たいせつにするんだ。

おいらは、エノポロの木にむかつてたつた。そばには、アヤカがいる。アヤカは、にんげんのおんなのこで、おいらのともだちだ。

「おいらが、でんぐりがえりをするから、アヤカは、かぞえておくれよ。」

「うん、わかった。」

「さあ、やるぞ。」

ばんばん、ぱぱばん。

でんぐりがえつて、ばん……(あれっ！)

おいらは、ころころと土手をころがって……ぼちゃあん。

川におちてしまった。

「いててて。」

おでことひざこぞうが、すりむけて血がでている。はな血もこぼれた。

これは、おもっていたよりたいへんだぞ。おいら、でんぐりがえりははじめてなんだ。

だって、おさらの水がこぼれちゃうだろ？

アヤカがハンカチではな血をふいてくれた。
「エノポロ、だいじょうぶ？」
「いたいけど、やらなくちゃだめなんだ。」

ばんばん、ばばばん。

でんぐりがえって、ばん。

でんぐり、でんぐり、にーっ。

(ああっ！目がまわるよ…)

でんぐりがえったひょうしに、おさらの水がこぼれてなくなって、おいらはのびてしまった。

「カポ！」

おいらが空にむかって、そう言うのと、るり色のことりがとんできた。

おいらのともだち、カワセミのカポだ。カポは、おいらのあたまに、水をポツとふきかけてくれた。

「ありがとう、カポ。おさらがかわいて目がまわっちゃうんだ。おいらがでんぐりがえりしたら、おさらに水をふきかけておくれよ。」

カポは、はねをパタパタさせて「チー」とないたが、なにかおもいついたようで、また、

「チー、チチー！」

となき、きょうだいのカバとカピとカプとカペをよんでくれた。

「そうか、みんなで、てつだってくれるのか。」

ありがとう！」

おいらは、すうつといきをすった。

「さあ、こんどこそ、きめるぞ！」

ばんばん、ばばばん。

でんぐりがえって、ばん。

カバが「パッ」と水をふいた。

でんぐり、でんぐり、にーっ。ピッ。

でんぐり、でんぐり、でんぐり、ぎゅっ。

プッ。

でんぐり、でんぐり、でんぐり…

「あれれ、おいら、四回まわったかな。」

アヤカは、うーんとうなって、
「どうだっけ、わからなくなっちゃった。もう一回まわったら？」
と言った。

「だめだよ。ぴったり四回まわらなきゃならないんだ。多くても少なくともだめなんだ。」

おいら、でんぐりがえりにむちゅうでかぞえられないから、ちゃんとかぞえておくれよ。」

「うん、わかった。ごめんね。こんどは、しっかりかぞえる。」

「ようし、これがさいごだ！」
おいらは、ぶるぶるっとみぶるいした。

ばんばん、ばばばん。

でんぐりがえって、ばん。パッ。

でんぐり、でんぐり、にーっ。ピッ。

でんぐり、でんぐり、でんぐり、ぎゅっ。

プッ。

でんぐり、でんぐり、でんぐり、でんぐり、くーっ。ペッ。

でんぐり、でんぐり、でんぐり、でんぐり、でんぐり、カチカチカチ。ポツ。

そして、エノポロの木に、おでこをこつんとあてて、目をつぶって、おまじないのことはを言った。

「おいらの木、
おいらの葉っぱ、おいらの葉
おいらの歯になれ、おいらの歯になれ。」

そして、口をあーんとあけた。

からだのあちこちが、すりきずだらけでひりひりする。いっばいでんぐりがえりをして、

あたまはふらふらだ。

でも、どうして？…しいんとして、なにもおこらない。

「お、おいらの木、
おいらの葉っぱ、…おいらの葉

おいらの歯になれ、おいらの歯になれ。」

そして、口をあーんとあけた。

からだのあちこちが、すりきずだらけでひりひりする。いっばいでんぐりがえりをして、

あたまはふらふらだ。

でも、どうして？…しいんとして、なにもおこらない。

「お、おいらの木、
おいらの葉っぱ、…おいらの葉

おいらの歯になれ、おいらの歯になれ。」

おいらの歯になれ、おいらの歯に……」

ぐすん……もう、でんぐりがえりなんかできないよ。

おいら、なみだとはな水がでてきた。

「おねがいします。」

アヤカも、手をあわせていのつてくれた。

「チ、チー！」

カポが、おいらのあたまの上でないた。

上を見ると、一まいの葉っぱが、ゆっくりゆれているが見えた。

やがて、白くなってきて、たいようのひかりにキラキラとまぶしくひかっている。

そのうち、はげしくくるくるとまわりだし、木のえだからプチツとはなれた。

そして、おいらにむかって、あめのしずくのように、おちてきた。

ぴ……ちよん。

おいらは、ぱくつと口をとじて、りょう手でおさえた。

(うん、うまくおさまったぞ。)

おいらは、アヤカとカポにむかって口をイーツとあけて、

「見て。どう？」

ときいた。

「きれい……まるで、しんじゅみたい。」

「チー。」

アヤカは、おいらのおでこに、きすぐすりをぬりながら、

「エノポ口は、なんども歯がはえかわつていいね。にんげんは、一どだけだもの。」
と言った。

「かっぱもおなじだよ。はえかわつたら、その歯をたいせつにするんだ。みんな、一回のはえかわりで、おわりにしたいのさ。だって、一本ぬけるたびに、いのちがけなんだ。あたまのおさらがわれちゃうこともあるんだ。」

「そうなの？」

アヤカはびっくりしたようだ。

そして、りょう手で、じぶんのほつぺたをやさしくおさえて、そっとう言った。

「たいせつにしなくちゃね。」

「そうだよ。」

おいらも、口のあたりをさすって、エノポ口の木をみあげた。

まだ、小さな木だけれど、おいらといっしょに大きくなるんだ。

エノポ口の木、おいらの歯をありがとう。

きつと、きつと、たいせつにするよ。